多発性のう胞腎に初の治療薬

やまなし医療最前線

県立中央病院から

《70》

進行遅らせる効果に期待

温井　郁夫
腎臓内科副科長

腎臓に多数ののう胞が発生・増大するため腎臓が大きくなり、徐々に機能が低下していく「常染色体優性多発性のう胞腎」。70歳までに約半数が人工透析治療を必要とする状態に至る遺伝性の病気だ。3月末に初めて治療薬が認可され、進行を遅らせる効果が期待されている。山梨県内では現在、県立中央病院のみで投与を開始することができる。

腎臓内科副科長の温井郁夫医師によると、初期には自覚症状がないが、のう胞が増大すると腎機能の低下のほか、背中を圧迫されるような痛みや、のう胞内出血による血尿、のう胞内感染による高熱や倦怠感などの症状が生じることがある。

腎臓以外にも、肝臓にのう胞が発生・増大したり、脳動脈瘤を合併したりすることもあり注意が必要だ。遺伝する確率は50%。人工透析治療を受けている人の約3%はこの病気が原因で、県内には約200人の患者がいると推定されている。

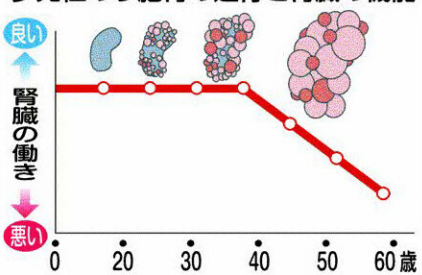
多発性のう胞腎の治療薬として世界に先駆け日本で初めて認可されたトルバプタンは、のう胞の増大を促す物質「cAMP」の働きを強くする抗利尿ホルモン「バゾプレッシン」の作用を抑制する効果がある。温井医師は「今まで特別な治療法がなかったが、やっと積極的な治療介入が可能になった」と話す。

根治薬ではなく進行速度を低減させる薬のため、継続して服用する必要がある。また投与はすべての人ではなく、腎臓の大きさや機能の程度など、規定の条件を満たした人が対象。投与を始めるタイミングは「多数ののう胞によって腎臓は大きくなっているが、まだ機能が低下していない状態」が最適という。

適正使用が望まれるため、トルバプタンの処方は資格を持った医師のみが可能で、投与を開始できる施設は県内では同病院のみ。温井医師は「のう胞が増大し支障が生じるのは主に成人以降。親や親戚がこの病気を患っている人は、成人になったら検査を受けてほしい」と話している。

＝第2、4木曜日に掲載します

多発性のう胞腎の進行と腎臓の機能



掲載日：2014年06月26日／ぶんくら／紙面頁013
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社